

特集

精神科治療、 この10年で 覆った常識とは

“不要な神話”を 手放した人たち

精神科領域には「不要な“神話”がある」という指摘があります。

たとえば、薬物依存症治療における「ダメ、ゼッタイ」や、「幻聴・妄想は否定も肯定もしない」「うつは励ましてはいけない」等です。

こうした方法が「うまくいかない」と気づいても、学校でそのように教えられたり、臨床現場でも常識だとされていたりするため、「うまくいかないのは自分の未熟さのため」と思い込むことも少なくありません。

しかし、「おかしいのはその方法のほうかもしれない」と立ち止まり、考え方を更新することによって乗り越え、覆してきた臨床家たちもいます。そのときこれまでの方法は役割を終え、現実の臨床の場から姿を消していくでしょう。

本特集では、このような新しい考え方を編み出した方、あるいは新しい理論や考え方に注目し、自身の臨床に結びつけ、既存の方法を覆した臨床体験を持つ方に、その更新された考え方の意義と有用性を解説していただきます。







『白花と黒出目金』



本特集扉のイラスト作者は、飯塚月（いづか・るな）さん。「人と自然との共生」をテーマに極細ボールペンや色鉛筆を使って描く彼女は、「嬉々!! CREATIVE」（本誌2022年11月号p536～539で紹介）に所属するアーティストです。「花や植物と共に絵の中を自由に泳ぐ魚たちのように、私も自由に様々なところへ行きたいという気持ちで描いています」

*「嬉々!! CREATIVE」は、生活介護・就労継続支援B型のものづくりスタジオ。現在約80名のアーティストが所属し、絵や立体作品だけでなくパフォーマンスアートも創造。多様性と完成度から、企業や地域等とのコラボレーションも多数。本誌は、障害者施設・事業所の“イメージを覆す”このアート集団に注目しています。